

## 5. 東近江市山路上山神社と祭礼

渡邊幸奈

本稿では、滋賀県東近江市山路町に鎮座する山路上山神社（以下、上山神社、図1）及びその祭礼について報告する。令和3年（2021）11月23日に山路町を訪れ、東近江市埋蔵文化財センターにおいて山路町自治会山路歴史編纂委員の櫛田尚氏に聞き取り調査を行った。また、11月28日には実際に上山神社を訪れた。以上の調査で確認できたことをまとめた。

### 1. 祭礼組織

まず、上山神社の祭礼組織について報告する。かつての上山神社の祭礼は13～16歳の前髪、17～35歳の宮世話、35歳以上の年行司、氏子総代から成る若い衆によって運営されていた。また、宮世話の内部はさらにアニワカイシュウと目付に分かれており、宮世話の監督は目付が行っていたとのことである。祭礼において前髪は太鼓を叩くなどの役割を担い、宮世話は幟、提灯を立てるなどの役割を担っていたが、人数が少なくなったために宮世話は30～40年程前に解散している。

現在の上山神社の祭礼は年行司、氏子総代、解散した宮世話に代わる祭典委員によって運営されている。年行司及び氏子総代は山路町内でそれぞれ4人ずつ推薦で選出されており、町内の集まりである総集会で他の役員を決める際に合わせて承認される。年行司及び氏子総代は神輿渡御に使われる神輿の管理をしたり祭礼の日程を協議して決めたりするなど祭礼の運営の大部分を担っており、春祭り、秋祭りそれぞれの世話をする（図2）。また、祭典委員は山路町内の各組から1名ずつ選出されているとのことである。なお、現在は20～30人程度の祭組という組織も結成されており、フキダシという花火の作成・実演を担っている。ただし、祭組に関してはどの組から何人選出しなければならないという規定はない。

また、これらの祭礼組織とは別に連中（レンジウ）という年齢集団が結成される。宮世話があった30～40年程前は数え年で結成されていたが現在は学年ごとであり、1学年で人数が少ない場合は2学年をまとめ、5～10人程度で構成される。また、各連中は自ら「賢愛社」「清愛社」「義勇社」などのような名前を付け、上山神社に石灯籠等を奉納する際には奉納物に連中名とそこに所属する人の名前を記して奉納している。かつては連中が祭礼に関する多くの仕事を担っており、その付き合いも一生続く強固なもので、年に1、2回程集まって忘年会などの宴会を催していた。しかし、前述のように現在は祭礼の運営は主に年行司、氏子総代が担っており、連中の繋がりも次第に希薄になっているようである。なお、上下の連中同士の関係は薄いとのことである。

近世には上山神社に専門の神職はいなかったことが報告されているが（能登川の歴史編集委員会編2013）、現在は山路町内に一軒ある神職の家が神事を執り行っている。なお、上山神社の神職は上山神社だけでなく、他の神社の神職も兼任しているとのことである。

## 2. 祭礼

続いて、上山神社の祭礼について報告する。上山神社の祭礼は、本祭前日の祭礼がヨミヤ、本祭当日がホンビと呼ばれている。祭礼の日程に関しては、かつては昔から決められた日に行われていたが50年程前から4月の土日に、前述のように年行司、氏子総代の協議によって決定されている。

ヨミヤ、ホンビの祭礼の順序及びホンビに行われる神輿渡御のルートは概ね事前報告の通りであり、平成18年(2006)年以降は祭礼の流れに大きな変化はないことが確認できた(東近江市教育委員会市史編纂室編2007)。ただし、山路町自治会が所有する江戸時代後期の山路の村絵図及び明治6年(1873)6月の年紀がある「神崎郡第壹区山路村地券取調総絵図」には、上山神社から隣接する林村との境まで道幅の広い参道が描かれていることが確認できる(図3)(山路自治会歴史編纂委員編2018、能登川の歴史編集委員会編2013)。明治までは林村との境まで進み、現在の北川橋の所を通過していたようである。また、かつては道が狭かったため、神輿を担いだまま山路川の中に入って神輿の渡御をしていた。また、上山神社には祭礼の際、神輿渡御の先導役となる猿田彦の面が伝えられている(山路町自治会歴史編纂委員編2018)。室町時代後期にあたる弘治年間(1550年代)の作とされており、以前は山路自治会館で保管されていたが、盗難防止の観点から現在では能登川博物館で保管されている。なお、櫛田氏によれば、現在の上山神社の祭礼で使用される猿田彦の面は新しく作られたものである。

上山神社の春祭りで特徴的なのはフキダシである。フキダシは竹筒の中に火薬を詰め、筒の片方に棒を、もう片方に紙を付けた、片手で持てる程の大きさの花火であり、現在は祭組によって作成されている。春祭りで使われるフキダシは20～30本程度であり、祭組はこれを1日で作成する。竹などは連中が準備し、フキダシの作成にかかる費用は山路町と各連中から出す。また、フキダシは明治初期頃に考案されたといわれている。当時、山路の浦には西江州の高島郡から木材や石材を運ぶ船が着いており、その中にいた「かみなり勇蔵」と呼ばれ親しまれた石工が西江州の石切場で花火の扱い方を覚え、他府県で見た手筒花火を参考にしてフキダシを考案したと伝えられている(山路町自治会歴史編纂委員編2018)。このことは、比良高島の地と山路の交流を考える上で非常に重要な点である。また、祭組は祭礼の際にフキダシの紙の部分に火をつけて火薬に点火し、火の粉が吹き出し、鳥居前で振り回す。鳥居前の空間はかつてはバンバと呼ばれていたそうだが、これに関しては、明治17年(1884)頃の山路村地図で上山神社前に「上馬場」「西馬場(下馬場)」という小字が確認でき(山路町自治会歴史編纂委員編2018)、かつて、上山神社の前には宿坊があり、馬場があったといわれている。上山神社の社宝にも鞍、鎧が残っているとのことである。ただし、現在ではこれらの小字はほぼ使われておらず、鳥居前の空間をバンバと呼ぶこともないとのことである。また、上山神社にはかつてから現在に至るまで「フキダシに火をつけたまま鳥居をくぐってはいけない」という言い習わしが伝わっているが、いつから伝わっているかは不明であるとのことだった。なお、秋祭りではフキダシは作成されず、代わりに餅まきが行われている。

また、昭和15年(1940)には皇紀2600年を奉祝し、上山神社春祭りで氏子中の女子が巫女として浦安の舞を奉納した。舞の奉納は15年間継承され、前年に担当した者が次年の者

に舞の指導をしたとのことである。しかし、現在は祭礼の流れの中から舞の奉納自体が無くなっている。

#### 図表出典

図 1, 2 2021 年 11 月 28 日筆者撮影

図 3 東近江市史 能登川の歴史編集委員会編 2008 を基に筆者作成

#### 参考文献

東近江市教育委員会市史編纂室編 2007 『能登川地区民俗調査報告書』 2 祭礼・年中行事 2・地域調査 1

東近江市教育委員会市史編纂室

東近江市史 能登川の歴史編集委員会編 2013 『東近江市史 能登川の歴史』 2 中世・近世編 東近江市

東近江市史 能登川の歴史編集委員会編 2008 『明治の古地図』 滋賀県東近江市

山路町自治会歴史編纂委員編 2018 『山路の歴史 調査報告書』 山路町自治会歴史編纂委員



図 1 上山神社拝殿



図 2 上山神社神輿蔵

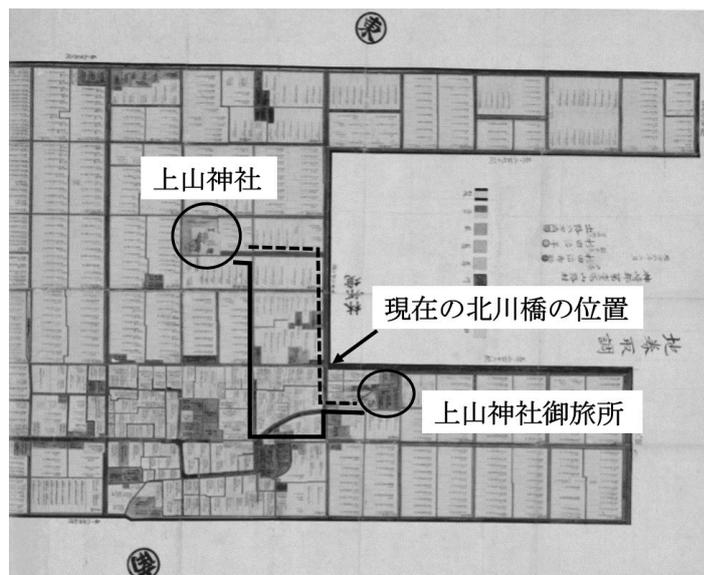


図 3 現在と明治期の渡御順路

図中に示した実線は現在の渡御順路を示し、  
点線は聞き取り調査で確認できた明治期の推定渡御順路を表す。